

地方公共団体（S区）主催のぜん息キャンプについての実践報告 ～とくにキャンプの専門的立場から～

○清宮啓太（余暇問題研究所） 廣田久久（〃） 上野 幸（〃） 山崎律子（〃）

キーワード： ぜん息児童、保護者、ぜん息キャンプ、組織キャンプ

1. はじめに

報告者らの所属団体では 1999 年から、ぜん息児を対象としたキャンプの指導・運営委託を担当する機会を得ている。2010 年から S 区のぜん息キャンプの委託を受けている。

本報告は、ぜん息キャンプの事例として S 区ぜん息キャンプを取り上げ、実施内容、特徴、実施状況をキャンプの専門的立場からまとめることで、より効果的な組織キャンプ実施のための示唆を得ることを目的とした。

2. ぜん息キャンプ実施の背景

ぜん息キャンプは、1960 年代から多くの地域で取り込まれてきたこと。国の施策としての支援は、昭和 48 年の公害健康被害補償法成立から、昭和 62 年の改正により健康被害予防事業として位置づけていること。この予防事業は“ソフト 3 事業”として、健康相談事業、健康診査事業、機能訓練事業（水泳訓練教室、音楽訓練教室、ぜん息キャンプ）があり、地方公共団体がこれらの事業を実施した場合、独立行政法人環境再生保全機構から助成を受けられる仕組みであるとしている。平成 23 年度のぜん息キャンプの実績は、実施：26、参加者：4,888 人であった。（独立行政法人環境再生保全機構：“ぜん息キャンプマニュアル”、“健康被害予防事業だより”より）

3. S 区ぜん息キャンプの特色とねらい

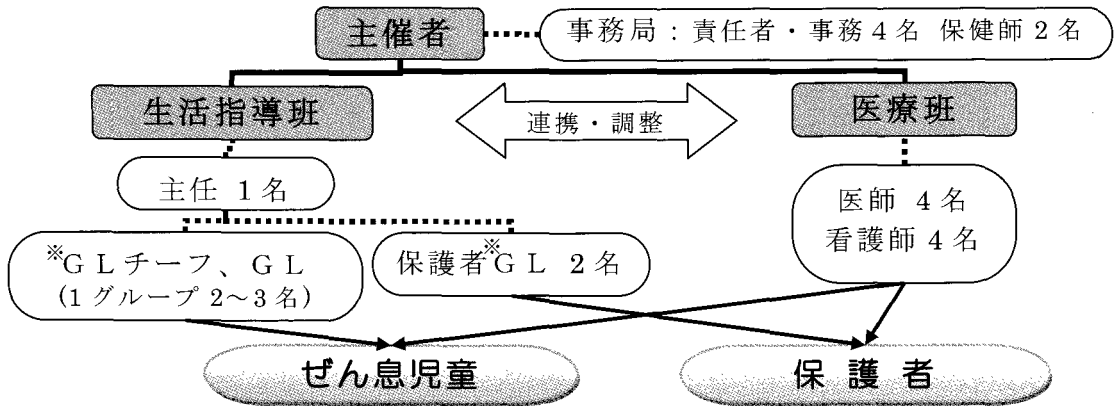
S 区では 2008 年まで気管支ぜん息等の児童のみを対象としたキャンプを実施してきたこと。その結果 S 区はぜん息キャンプが“ぜん息の正しい理解・対処”“健康意識・自己効力感の向上”などに成果を上げてきたことを報告している。しかし、長年にわたるキャンプ実施の中で“継続的に予防し続ける習慣を身につける”ためには、キャンプ後の家庭の理解と協力を課題としていた。そこで 2010 年のぜん息キャンプから児童とその保護者も対象とした。この課題は委託業者選定プロポーザルにおいてキャンプの趣旨にとり上げ、対応するキャンプの提案を求めていた。

そこで報告者らは、S 区に対して、対象親子と一緒にキャンプに参加するのではなく、児童は児童の野外生活プログラムを、保護者は保護者の野外生活プログラムを行うこと、その中で必要な時は合同で実施する内容を提案した。このような形態で実施することは児童だけでなく、保護者においても楽しみながら野外生活プログラムを行うことで保護者同士の連帯感ができ、保護者の抱える不安を減らし、自信や安心を得て、ひいては家庭や日常生活での継続意欲の向上の目的達成につながると考えた。S 区はその提案に同意した。

4. S 区ぜん息キャンプの概要、運営組織と役割

- (1) 日程：8 月中旬ごろに実施 2 泊 3 日
- (2) 場所：長野県内の S 区立施設と周辺
- (3) 対象：S 区内在住の気管支喘息の児童（小学 1～6 年生）とその保護者 定員 30 組
- (4) 実施実績：2010 年度（児童 19 名、保護者 16 名）
2011 年度（児童 18 名、保護者 14 名）※継続参加保護者 11 名
2012 年度（児童 13 名、保護者 11 名）※継続参加保護者 5 名

(5) 運営組織と役割



※GL = グループリーダー

図1 S区ぜん息キャンプ運営組織

- 主催・事務局： 参加者集約、会場準備、医療班との調整など
- 医療班： 診察、服薬管理指導、児童・保護者へのぜん息学習(各4回)指導など
- 生活指導班： 全体進行、学習・服薬管理指導補助、集団生活・野外活動指導など

4. 実施状況

表1 ぜん息キャンプの実施状況

活動	児童	保護者
交流	リーダーとプログラムを楽しむ事によりすぐに友達になれた	日程・活動が進むごとに、交流、コミュニケーションが進んでいた
グループ活動	班で服薬管理指導を受ける事によって良い習慣を身に付けぜん息への理解も深まった	個々の保護者の家庭での取り組みや迷いなどを自ら話す場面が多く見られた
ハイキング	診察結果から参加を制限された児童に対し、GLが自己管理の大切さを指導した	体力・体調面から参加を不安に思っていた保護者も全参加できた。これをきっかけに会話の輪も広がっていた
キャンプファイヤー	ゲームに楽しく参加し保護者のスタンプを真剣に見入っていた	ぜん息に関するメッセージのスタンプを全員が協力して楽しく発表した
親・子別の集団活動	親から離れたがらない児童も見られたが徐々に自分達の活動を楽しんでいた	親子一緒に活動を考えていた保護者もいたが、最後にはキャンプの意図を理解し、積極的に活動していた

5. まとめ・課題

総じて参加者は医療関係者、リーダーの元でぜん息の知識・技能を体験し、野外生活を存分に楽しみながら、同じ問題を抱える者同士の連帯感を育成できたと考える。またキャンプの目的である家庭での継続に向けて、その意識啓蒙が図れたと推察する。

その上で今後、参加者（児童、保護者）と、スタッフ（指導員、医療班、事務局）の指導・対応、プログラム（学習、キャンププログラム）との関連性を探ることが効果的なぜん息キャンプの実施につながると考える。そして、今後もぜん息キャンプにキャンプの専門的立場として、継続して関わることで組織キャンプの発展につなげていきたいと考える。